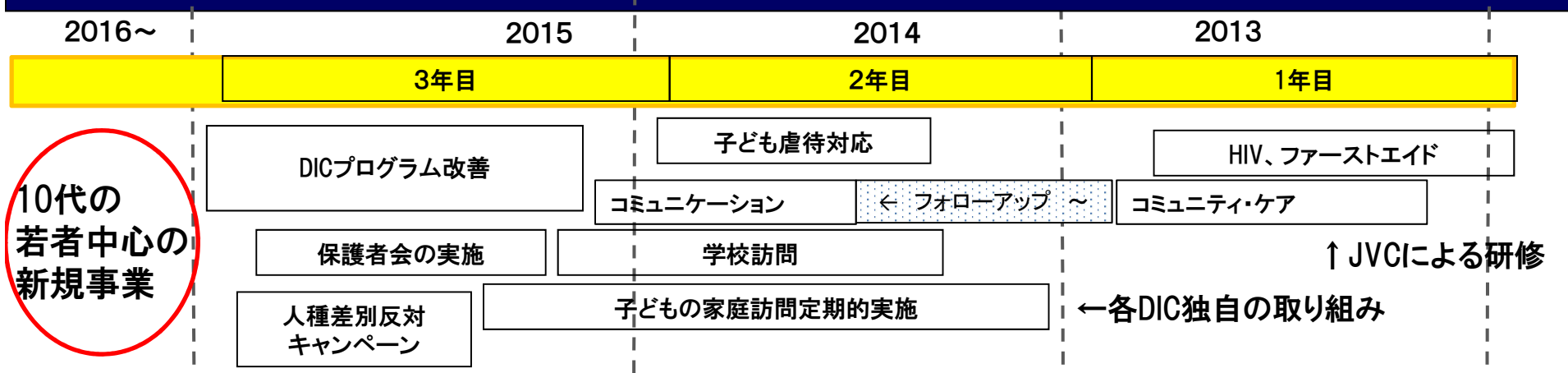


2012～15年、3カ年事業の中での変化と見えてきた「芽」



子どもたちがDICの変化に反応し始める

子どもたちがDICに来ることの意味を見出し、積極的な参加や子ども同士のサポートの様子が見られるように。

日々のプログラムを子どもたちの興味を引く内容に工夫

HIVケア事例の増加

子どもケアセンター(DIC)の場の重要性を認識するようになり、ゲームを通して学びを得るなど、日常的な活動への工夫が取り入れられ始める。また、地域と子どもたちからの信頼を得て、HIV陽性の子どものケアの相談などを持ちかけられるようになる。

啓発活動を活発に開始。学校での特別授業を積極的におこなうように。

「子ども」を中心に考えたアプローチへ

他者との協力を強化

地域の人びととともに子どもを支えることの重要性に気づき、関係構築を始める。ソーシャルワーカーや村長、子どもたちの保護者と対話をし、協力を仰ぐようになる。同時に子どもたちの虐待ケースなど解決件数が増える。

自らの役割を認識。

研修を通し、子どもたちに対してボランティアとして果たすべき役割を認識、子どもたちの家庭環境を知ることの重要性を認識し、自ら継続的な家庭訪問を開始する。

スキルを身につけ、知らなかったことに気づく

「学ぶ」ことで、自分たちが知らなかったこと、活動に必要なことが見えてきた。しかし、学んだ知識の使い方がわからない状態。